

# 「わたし」 「わたしたち」

9月から礼拝のお話が一変します。これまでは新約聖書からイエス様の言葉やしたことを話してきました。9月からは旧約聖書からお話しします。旧約聖書はイエス様が生まれる前に書かれたものです。そのお話を聞いて、11月後半からはイエス様の誕生につなげます。

旧約聖書の一番最初には『創世記』が出てきます。その創世記の最初は神様が全世界を作ったという『天地創造』物語です。そこに最初に登場する人物はアダムとエバです。神様が二人を造られたとき、最初からペアで造ったわけではありませんでした。まずアダムを造って、次にその分身としてエバを造りました。神様がエバを造った理由は「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助けける者を造ろう。(創世記2:18)」でした。

創世記の物語は宇宙や地球や生物の生成を科学的に説明するものではありません。神様はどんなお考えで世界や人を造ったかを語ることで、世界や人間の存在の本質を神様との関係の中で伝えようとしているのです。そのような読み方で考えると、神様が人を独りにしておくことは良くないと考えてエバを造ったという記事は、読み過ぎることができません。人間は独りで生きていくべきものではないということなのです。関係の中で生きることが人間として自然で真っ当な生き方だということです。係わり合い、助け合い、感じ合い、育ち合う関係の中でこそ、人は人として生きるのです。神様はそのような存在として人を造られたというのです。

当節は人との関係をおっくうがる風潮があります。人とかがかわるのはかったるいのです。人とかがかわるといふんなことがごちゃごちゃ起こります。そんなことに首を突っ込むのはウザイのです。そうした風潮の典型が「オタク」なのかもしれません。誰にも邪魔されない自分の世界に入り込むのです。そこで安心します。人との関係を持たずに蛸壺のタコのようにしているのが一番楽でいいというのです。生身の人間と付き合うよりも、ゲームの中のバーチャルな相手と付き合うほうがいい。でも神様から見たら、そのような生き方は良くない。神様は人間をそのようなものとしてお造りになったのではない。創世記はそう言っています。

1学期は子どもたち一人ひとりが自分の居場所、自分の楽しさ、自分の満足を獲得することに主眼を置きました。そして9月から始まる2学期は、子どもたちが関係の中で過ごす園生活に変わっていきます。そこでのキーワードは「わたしが楽しいから、みんなも楽しい。」「みんなが楽しいから、わたしも楽しい。」です。このような「わたし」「わたしたち」が2学期からの園生活のポイントです。自分を犠牲にして、我慢してみんなに付き合うものではありません。自分の笑顔にはみんなを楽しくする力があるのです。みんなの笑顔には自分の心を開いてくれる力があるのです。これからの園生活で子どもたちはそのことをたくさん経験し、味わいます。神様の国でアダムとエバが助け合って楽しく生きたように、です。

いろいろな人が出入りする家庭があります。筆者の育った家庭は牧師の家でしたから、しょっちゅう他人がいて一緒にご飯を食べていました。一方家族以外の人や玄關から中に入ったことのない家庭もあるのかもしれません。プライバシーとかセキュリティとかが騒がしい時代ですから、後者のような家庭が増える傾向にあるのではないのでしょうか。人との関係の中で生きること、学習することのように思います。家庭の生活、両親の生き方を通して、子どもたちは人との関係で生きることや学習していくのでしょ。おやじの会発足以来、ご家庭同士のオープンな家族ぐるみの付き合いが増えているように感じます。これはとても良いことで、大切なことなのだろうと思います。